

〔25-1〕 D D村の水稲作における種子準備量

宮川修一

N S B 耕作農家に対する聞き取りと、作付の記録とから、D D 村の標準的な種粃準備量を推測する。

1. 種子貯蔵量（単位面積当たり）

1983年の作付のため1982年に確保したと答えた粃の量を、各農家の耕作面積（1983年調べ）で徐して求めた。対象農家数 9。

結果

(1) 貯蔵量をtangで答えている場合。（5例）

1 tang = 10kg換算

平均 30.2kg/ha (4.8kg/rai)

最大 37.6kg/ha

最小 23.0kg/ha

(2) tangで答えている場合と袋で答えている場合を混合。（9例）

1 麻袋 = 60kg 1 肥料袋 = 20kg 1 tang = 10kg換算

平均 44.6kg/ha (7.1kg/rai)

最大 87.5kg/ha

最小 22.7kg/ha

2. 播種量（単位面積当たり）

1983年、N S B 内の水田の作付けのため、苗代に播種された粃の量を、作付けされた水田面積で徐して求めた。対象苗代数 25。

結果

平均 31.4kg/ha (5.0kg/rai)

最大 78.6kg/ha

最小 9.5kg/ha

3. 予備貯蔵量について（1と2の比較）

苗代がなんらかの被害を受け播き直しを余儀なくされることを想

定した、種粃の予備貯蔵の慣行があるだろうか。1の(1)の値と、2の値は殆ど等しい。この場合だと予備貯蔵量は無いことになる。他方、1の(2)の値をとると、約 2kg/raiの予備があることになる。けれども容量が大きい袋を単位にした答よりtangによる答の方が比較的誤差が少ないであろうとすると、予備貯蔵は殆ど無いと考えて差し障えないだろう。このことは、数は少ないものの1と2との調査が重なった農家の例からも確かめられる。また、慣行的な種粃の貯蔵期間を尋ねた他の調査の結果がいずれも約6ヶ月で、その後の余りは食用とすると答えた例が多かったことも、これを裏付けるものである。たとえ予備貯蔵があったとしても、高温多湿の雨期を経過した後の粃に十分な発芽力は期待できないので、この点からも予備貯蔵の意味はないことになる。

4. DD村全体での種子量

1と2から、村全体での平均的な種子準備量が、耕作面積に対して5kg/rai($1/2 \text{ tang/rai}$)であるとする、村の水田耕作面積 約 2,263rai (中間報告 I p170) に対する種子量は11,315kgであると推測される。